

王建新発表「トルファンの自然、水と農業生産—適応の条件とパターンについての発展人類学的考察—」に対するコメント

シンジルト

*

王発表に対する全体的な感想を述べた上で、いくつかの問題確認をしつつ、コメントをさせていただきます。

全体的な感想として、緻密な量的データが提示されていたこと、種類豊富な文献が引用されたことなどから、発表者長年の研究蓄積をあらためて実感し、そのパワーに圧倒された次第である。しかしだからこそ私には、発表者は文化人類学者としての強靭さをあえて披露されなかったのではないかという不満も残った。

*

確認だが、「発展人類学」とはなにか。これは、サブタイトルに登場するキーワードであり、発表内容の全体を貫く発表者の研究視点にも関わるものと思われるからである。

いうまでもなく中国語においても日本語においても「発展」という漢語は、前へ進むというニュアンスをもち、とにかく「すべき」という前提を持つ言葉である。進歩、まい進、開化、上達などの表現とも近似する自動的語である。

確かに、経済的に「遅れている」社会集団Aが、「進んだ」社会集団Bを自ら到達すべき目標とし、Bへ向かって進んでいくのが当然であり、それが「発展」と理解する人が多い。この類の理解における「発展」は、子供が大人になること（発育）とほぼ同じくある種の必然性を意味する。

しかし、社会学者とりわけ文化人類学者が果たして、そのような理解に基づく「発展」という視点をもって、人間の社会や文化（生業）といった複雑な研究対象を論じきるのか。この視点は、よく言えば、みなハッピー。悪く言えば、ひとつの声しか聞こえない。また、この視点は、疑う余地のない前提を共有せざるを得ないという意味で、「行方側」の論理であり、その自信の一方的な拡張である。

この「発展」という言葉の響きに、どうしても、社会／文化進化論的な考え方のようなものを感じてしまうのである。ここでいう「発展人類学」を英訳すると development anthropology になるだろう。他方、既成の表現として、開発人類学というものがある。もしかしたら、ここでいう「発展人類学」は開発人類学のことであろうか。というのも、開発人類学も development anthropology に対応するからである。

「発展」と比べて「開発」は基本的に他動的語である。「開発」という語には、「開拓する、採掘する、使用する、利用する、自分を豊かにすること、食べ物にする、搾取する、略奪」などのニュアンスも含まれ、包括性の高い表現である。複雑で一面的には捉えきれ

ないというのが、われわれの研究対象である「社会」や「文化」の特徴である。「発展」に比べると、「開発」には、よしあしが同時に含まれる。そのため、どちらかという、社会や文化をめぐる複雑な現実を理解するには、「開発」という語のほうがよりましに思われる。少なくとも、この語の使用によって、複数の声ははじめて聞こえてくるからであり、人類学者の登場の余地がうまれてくるからである。

*

もし開発人類学であれば、人類学的なアプローチで、できうる貢献とはなにか。

冒頭に人類学の強靱さと述べたが、それは、既成事実、あたりまえと思われるもろもろの事柄を根本から疑い、時にはそれと戦おうとする姿勢（視点）のことを意味する。なるほど、それには客観性が欠く以上、科学ではないという人もいよう。けれども、目的合理性に適合しない文化的な人間性や人間行動を研究対象にする諸領域において、いわゆる科学の模倣をすることにはそれほど価値が期待されていない。そこで、「発展とは何か、開発とは何か」といったやや伝統的な設問のほうが、むしろ依然重要である。

人類学者である発表者はこれまで新疆におけるイスラムのウイグル化、ウイグル文化のイスラム化の問題に関心をもち、その相関関係がいかに形成されたかを、民衆・宗教的知識人・国家政策といった主体の間のやり取りを観察することで、明らかにしてきた。このことは、広くウイグル社会の教育とその社会秩序の関係の解明でもある。その解明は、共和国の誕生つまり 1950 年代以降とそれ以前との時代背景の比較を通じて、達成されたかと思う。そこで、1950 年代という時間的な境界が重要なファクタとなったのである。

メインタイトルにも示されたように、今回の発表は新疆東部トゥルフアン（トルファン）の事柄であり、それが新疆西部のイリ地域といかなる直接的な関係をもつのかは別として、新疆という範疇に収まっていることは確かである。東西の違いがあることは当然だが、同じ新疆という行政単位に包摂されているかぎり、何らかの共通性があると考えられる。

人間界と自然界との関係に着目していると思われるこのプロジェクトの文脈で言えば、上述した 1950 年代という時間的な境界は、今回の発表内容を理解する時にも重要なファクタとなるはずであろう。つまり、その境界の前と後、自然資源やその利用をめぐるトルファン地域社会住民の認識においてどのような変化がみられるのかに関する言及が欲しかった。このことは、イリ地域にも類似する可能性があることを考えると、なおさら大事である。いうまでもなく、こうした事柄は、けっして公的機関が公表した量的データで簡単に理解できる性格のものではなく、むしろ該地域で長期的な参与観察を行ってきた発表者にしか言えないものである。ところが、それに関しては、発表者はほとんど触れてなかった。そういう意味で冒頭において「文化人類学者としての強靱さをあえて披露されなかったのではないか」と述べたわけである。そのあたりをぜひご教示いただければと思う。

ISSN 1346-9355

オアシス地域研究会報



第6卷 第1号

2007年2月

イリプロジェクト研究会
総合地球環境学研究所

